

オオバコ

大葉子おおはこ オオバコ科

この道一筋、踏まれて生きる

踏まれても踏まれてもたくましく生きる雑草。その代表格は間違いなくオオバコだろう。オオバコは人に踏まれやすい道やグラウンドなどによく生えている。

オオバコは「大葉子おおはこ」の意味である。その名のとおり大きな葉が特徴的だ。別名の「きゃあろつぱ」は「かえる葉」の意味で、その葉がカエルに似ていることから名づけられている。そのせいかカエルにちなんだ言い伝えも多い。オオバコの葉を死んだカエルにかぶせると生き返るといわれている。聞くところによると、「がまの油売り」で有名な四六しろうくのがまの主食もオオバコらしい。

実はこのカエルに似たオオバコの葉には、踏まれに強い秘密が隠されている。

オオバコの葉は見た目にとってもやわらかい。もし頑強なかたい葉だったらどうだろう。踏まれに耐えているうちにはいいが、限界を超えると折れたり、破れたりしてしまう。

「柳に風」ではないが、むしろやわらかい葉のほうが踏まれに対して抵抗が少なく、強さを発揮するのである。しかし、ただやわらかいだけではちぎれてしまう。だから、オ



3

オバコは葉のなかに五本の丈夫な筋を通してゐる。葉をちぎってそつと引つ張ると、この筋を抜き出すことができる。やわらかさの中に、かたさを合わせ持っているからオオバコの大きな葉は丈夫なのである。柔軟なだけでも、頑固なだけでも、どちらか一方ではダメだということなのだろう。

花をつける花茎かけいもやわらかさとかたさを合わせ持っている。ただし、葉とは逆の構造である。花茎は外側がかたい皮でできているが、逆に中はやわらかい構造になっている。かたいだけの茎では折れてしまうが、中がやわらかいのでしななって衝撃をやわらげるのである。しかもさらに頻繁に踏まれる場所では、花茎を斜めに伸ばす。まっすぐに伸びていると踏まれたときにつぶされてしまうが、斜めに伸びていれば自然と倒れて衝撃が少ないのだ。このようにオオバコはさまざまな工夫を凝らして踏まれることに耐えている。

踏まれに強い秘密はほかにもある。ふつうの植物は茎に葉がついているが、オオバコの葉は地面に伏している。これは茎がごくごく短く、地面に近いところに葉を重ねて出しているためだ。茎が長いと折れたり倒れたりしてしまう。茎や葉を低くかまえていることも踏まれることへの重要な対策だ。柔道や相撲でも重心は低いほうが投げられにくい。テニスやバレーボールのレシーブも腰を落とす。背伸びせず、低く構えることは守

りの基本なのだ。

こんなにも苦勞して踏みつけに耐えているオオバコ。しかし、「かわいそうだから、踏みつけないようにしよう」と同情する人がいたら、それはオオバコにとってはありがたい迷惑な話である。なぜならオオバコは踏まれ続けなければ生存することができない宿命にあるのだ。

もし、人々が踏みつけることをやめてしまったらどうなるだろう。踏みつけられることによって生存できなかったほかのさまざまな植物たちが、生活の場を求めてその場所へ侵入してくるだろう。オオバコは踏まれには強いが、ほかの植物との生存競争には弱い。だからそうになると、やがてはほかの植物に追いやられてしまうのである。

ほかの植物との争いを避け、苦境に身を置いて自らを鍛え上げていく。それがオオバコの生き方である。「我に七難八苦を与えたまえ」と月に願かけしたのは戦国時代の武将・山中鹿之助やまなかしかのすけであった。オオバコもきつとこれと同じ心境なのではなからうか。

茶道、華道、柔道、棋道きどうなど究めるべき道は多いが、オオバコもまた苦難の道を選んだのである。道に沿って、オオバコはどこにでも生えている。中国では「車前草しやぜんそう」、ドイツでは「道の見張り」と呼ばれているのもそのためである。「オオバコの山登り」ということはもあって、登山道に沿って高山地帯にまで生えていることさえある。山深い

けもの道にも生えている。道がある限り、オオバコの生えない場所はないとさえいわれているくらいだ。まさに道を究めりである。

⑤
そこまで道に沿って生えているのには理由がある。オオバコはただ踏みつけに耐えているわけではない。逆境を逆手にとって踏まれることを利用して戦略を展開している。オオバコの学名である「プランターゴ」は、足の裏で運ぶという意味である。オオバコの種子には紙おむつに使われるものとよく似た化学構造のゼリー状の物質があつて、水に濡れると膨張して粘着する。そのため靴や動物の足に踏まれると、くっついて運ばれていくのである。最近では、自動車のタイヤについて広がっていく。こうして踏まれることによつて種子を散布するオオバコは、ふたたび踏まれやすい場所に芽生え、自らの領域を広げていくのである。

決して誉められた表現ではないが、オオバコは「ブスの恋」とも呼ばれている。醜女しこめの深情けのように種子がしつこくまとわりついてなかなか離れないからである。どこまでもたくましく強い生き方なのだろう。踏まれて生きる「ブスの恋」のたくましさに心惹かれる酔狂者は私だけだろうか。

特徴 [編集]

日本全土に分布する雑草である。茎は短く、地面に埋まっている。葉は葉柄があり、さじ型。花は穂状につき、緑色。踏みつけに強く、人などがよく踏む道路脇などの場所に生える。踏みつけが弱い場所では、高くのびる性質を持たないので、他の草に負けてしまう。

葉や種子は咳止めなどの薬になる。また、花穂を根本から取り、二つ折りにして、二人が互いに引っ掛けあって引っ張り、どちらが切れないかを競う遊びがある。

葉が広く大きいことから「大葉子」という。「車前」は漢名で、車(牛車・馬車)が多く通る道の端に多く生えることからこの名がついた。

リクガメのエサとしても有名でカルシウムが多い。

生薬 [編集]

オオバコの成熟種子、花期の全草を乾燥したものを、それぞれ**車前子**(しゃぜんし)、**車前草**(しゃぜんそう)といい日本薬局方に収録された生薬である。また、葉だけを乾燥させたものを**車前葉**(しゃぜんよう)という。これら3つはともに消炎、利尿、止

漢方では、車前子は**牛車腎気丸**(ごしゃじんきがん)、**竜胆瀉肝湯**(りゅうたんしゃかん)薬的なものであり、漢方ではまず使わない。

(大葉子:オオバコ科)



(撮影場所:しばぎ橋/撮影:2008/09/02)

語源	葉が広く大きいから。道端や駐車場や子供の遊ぶ広場にはオオバコがあります。それはオオバコは踏みつけに強くほかの雑草が生えていても踏みつけに強いオオバコだけになってしまったからです。漢方では車前草といって駐車場や子供の遊ぶ広場に多く生育している。薬草で下痢止め、咳止め、止血の役目をします
分布	本州、北海道、四国、九州
生育地	日当たりのよい道端、荒れ地など
花期	4～9月



名前	オオバコ
科名	オオバコ科
学名	Plantago asiatica L.
花期	春～秋
とても強い野草で、ふみつけの多い道などにも生えています。	
若菜はひたしものや天ぷらにして食べられます。乾かした葉は「せき止め」の薬草にもなります。	
名前のいわれ	大きな葉にちなみ「大葉子」という名がついている。

おおぼこ No.035



名 前 オオバコ
大葉子

別 名 オンバコ、スモトリグサ

科 名 オオバコ科

学 名 *Plantago asiatica*

花 期 4～6月

草 丈 10-20cm

生育地 空地、庭、道端

仲 間 ヘラオオバコ、ツボミオオバコ

その他 薬用効能有

撮影地 豊橋市牛川町

※画像はクリックで拡大します。

メ モ

水田のあぜなど人の踏みつけの多い場所によく生育しています。漢名で車前草というのはそのためです。オオバコの名前は幅の広い葉に由来しています。オオバコの葉や種子（車前子という）はセキ止めの薬です。種子は濡れると粘着力をもち、人や動物の足について広く運ばれます。丈夫な花茎を交差して引っ張り合い、「すもうをとる」と言って遊びます。もちろん切れた人が負けです。下の画像はオオバコの花です。



[オオバコ](#)



[オオバコ](#)



[ヘラオオバコ](#)



草種 : 多年生広葉雑草/オオバコ科
分布 : 北海道、本州、四国、九州、沖縄
草丈 : 10~20cm

生育期間: 通年
繁殖 : 種子

生態

空き地、庭、道ばたなどいたる所に生育し、人の踏みつけの多いところによく生育する代表的な人里雑草です。葉は卵形で数本の脈があります。4~9月にかけて10~20cmの花茎を立てて、先に白い小花を穂状に多数つけます。種子は濡れると粘着力を持つため、靴の裏などに付いて広まってしまうので人の歩いたところにはよく生育します。

豆知識

最近話題になっているオオバコダイエットのオオバコとは種類が異なります。
オオバコの葉には柄に5本のすじがあり、柄を上手に切って引っ張ると上の写真のようにすじが出てきます。



オオバコ<車前草> オオバコ科 オオバコ属 *Plantago asiatica*

路傍やグラウンドに見られる多年草。高さ20cm程度。春～夏に開花。昔はこのオオバコの花茎でギタンバッコと言いながら綱引きをしたものである。

分布 日本全土

花期 4-9月

撮影 城ヶ島 98. 5. 30







オオバコ 右は花穂の一部
本種とトウオオバコ、セイヨウオオバコの区別は果実・種子の形態を見る













